



## 令和 7 年度 後期学校評価アンケート結果報告

### 1 実施期間

令和 8 年 1 月 13 日～1 月 23 日

### 2 対象

保護者（小学部、中学部、高等部）

児童生徒（小学部、中学部、高等部）

教職員（管理職を除く）

### 3 実施方法

○保護者・・・各項目について「実現度」を 5 段階で回答  
紙媒体もしくはアンケートフォームより回答

○児童生徒・・・各項目について「実現度」を 3 段階で回答  
紙媒体もしくはアンケートフォームより回答

○教職員・・・各項目について「実現度」を 5 段階で回答  
アンケートフォームより回答

### 4 回答数（率）

	保護者 234	児童生徒 241	教職員 177
R7 後期	158 (68%)	82 (34%)	170 (96%)
R7 前期	161 (70%)	64 (27%)	160 (97%)
R6 前期/後期	67%/64%	25%/34%	93%/98%

※保護者数は、兄弟姉妹等の重複を除く家庭数で示す

※R6 前期/後期については、回答率のみ示す

#### 【回答方法について】

回答者の約 20%が紙媒体による回答であった。アンケートフォームによる回答方法は、前期同様紙媒体に QR コードを記載し、保護者自身の端末から読み込む方法と、保護者連絡ツール「すぐーる」にアンケートフォームの URL を配信した。このように、複数の回答方法を提示したことも回答率を概ね維持できたことにつながったと考えられる。回答期間中に「すぐーる」を通じて再度回答依頼を配信したことも、保護者の回答を促す上で効果的であった。

## 5 アンケート項目について

「令和7年度京都市立呉竹総合支援学校グランドデザイン（※下記参照）」に基づき、選択形式と自由記述でアンケートを作成した。

### 研究テーマ（2年次）

「ウェルビーイングな学校を目指して」

～新たな、自由な発想での授業研究を通して、児童生徒の

「やってみたい」「なんとかなる」「ありがとう」「自分らしく」の姿を引き出す

学校教育目標である「社会参加し、自分らしく生き生きと活動したいという児童生徒の願いの実現」を目指し、大切にしたい言葉「やってみたい」「ありがとう」「なんとかなる」「自分らしく」の視点で授業を見つめ直すことで、より魅力的な授業実践につながるのではないかという仮説のもと研究(2年次)にも取り組んできた。今年度はその成果をより広く共有し、また教職員自身の振り返りや今後の実践にもつなげていけるよう、研究発表会を2月に開催した。全国より多くの参加者をお迎えし、高知大学教育学部教授・西村健一氏を講師にお招きして、「子どものウェルビーイング向上を目指して」と題したご講演をいただいた。大切にしたい4つの言葉はそれぞれ独立しているわけではなく、相互に作用し合っていることも研究の成果として教職員全体で感じ取ることができた。今年度から新たに発足させた「地域協働プロジェクト」「地域支援プロジェクト」のさらなる充実を目指し、校内活動や地域連携を強化させ、呉竹の子どもたちの強みを生かした地域とともに成長できる学校づくりに引き続き取り組んでまいります。

令和7年度 京都市立呉竹総合支援学校 グランドデザイン  
呉竹総合支援学校再構築（令和8年度末完成）に向けた

## 「呉竹バルーン構想」Ⅱ

～くれたけから新しい風を～

学校教育目標 社会参加し、自分らしく生き生きと活動したいという児童生徒の願いを実現する

大切にしたい4つの因子

「やってみたい」「ありがとう」  
「なんとかなる」「自分らしく」

学校経営の指針

1. 子どもも教職員も学び育つウェルビーイングな学校
2. 危機管理を徹底し、子どものいのち・人権を守りきる
3. 専門性の向上・維持を図り、地域社会での役割を果たす

令和7年度重点的取組

地域協働プロジェクト、地域支援プロジェクト、研究推進委員会を中心に、  
学校・地域・社会が一体となった共生社会の基盤となる学校づくりを行う

＜目標1＞授業の創意工夫や改善を図り、魅力ある教育の実践と発信を行う

●子どもの思いや反応を丁寧に受け止め、社会的な人と関わっていく力を育む  
●子どもたちの可能性を広げ、生活を豊かにするための手段として、情報端末等を適切かつ有効に活用する

●子どもが何を学ぶ、何ができるようにいったのか、学んだことが何につながるのかを評価し、授業改善を行う

＜目標2＞地域連携、地域協働、地域支援の充実を図る

●センター的機能を強化し、地域の学校間、施設等への支援の充実を図る

●ライフスタディやワークスタディでの学習を通して、共生社会の実現に向けた取組を進める

●地域で役割を果たす取組や交流及び共同学習の充実を図る

＜目標3＞活発な研究活動を通して働きがいをもつ

●授業発表の主体的で活発な授業研究を通して、より良い授業づくり

＜目標4＞働きやすさを追求し働きがいをもつ（業務改善と環境整備 学校を愛しく）

●業務改善案を積極的に提案、検討し、組織的・効率的な業務の見直しを図る

●職員間のコミュニケーションの活性化を図り、風通しの良い職場、心理的安全性の高い職場をつくる

呉竹の強み

- 多様な文化を受け入れる柔軟性や寛容性
- 子どもの自由で多様な表現活動
- ICT活用、芸術系活動、余暇活動の充実など先進的な取組、ユニークな取組
- 迅速な行動力
- 学部を超えた児童生徒のかかわり
- 行事に向かうパワー
- 学校祭（体育の部・文化の部）等の行事に向けた取組

呉竹の伸ばしたい点

- 学校力と組織力
- 小中高の連続性と連携性
- 各部員の連携性と協働性
- 地域への発信と役割
- 教職員の専門性、資質能力の向上
- 危機管理する力

推進する風を

起こす

児童生徒

保護者

地域

教職員

幸せの風

## めざす

めざす児童生徒像

- 自分の心や体を大切にすること
- 人を大切にし、共に生きる
- 意欲や関心を持って主体的に活動する
- 自分の思いや考えを伝えようとする
- 願いや夢に向かってすすむ
- 役割を担い、役立ちようとする
- 自分から挨拶をする
- ルールや約束を守る

めざす教職員像

- 児童生徒の健康・安全を守る
- 児童生徒を愛し、児童生徒の人権を大切にすること
- 児童生徒の主体性を尊重すること
- 授業を大切にし、熱意をもって、児童生徒を教育すること
- 自らの専門性向上をめざして日々精進すること
- 保護者や地域と連携し、他の教職員と協力しながら仕事をすること
- ライフ・ワークバランスを実現すること

めざす学校像

- 生命を守り切る学校
- 児童生徒の学びを大切にすること
- 信頼される学校（保護者や地域との信頼関係を基にした、安心・安全で開かれた学校）
- 子どもや保護者、地域に夢や希望を与える学校
- 心理的安全性が高く、一人一人の力が発揮できる学校

共生社会の実現・自立と社会参加

令和7年度各部の目標（取組の重点）

小学部

様々な経験を通して、興味関心をひろげるとともに、やりたいことを実現するための力を育てる  
(1)健康な身体を作る  
(2)好きなことややりたいことを見つけて広げる教育を実践する  
(3)他者とともに生きるための素地を養う  
◆進予定の簡略化、学部会や主任会の回数減と内容の精選、基本時間割の見直し、教材・教員の共有（呉竹教材ラボ、業務の共有（依頼ホード、今年後の有効活用）、年間業務の見直し（新年度準備、年間指導計画作成、引継ぎ資料の検討）

中学部

子ども一人一人の可能性を広げる  
(1)基礎的・基本的な力をさらに高める  
(2)自ら考え、自ら活動する主体的な態度を育てる  
(3)家庭や地域等さまざまな場面でチャレンジする態度を育てる  
◆「教材・教員」の共有、「年間学習計画」の共有（学年ラフ・ワークシート）、「生徒情報の共有（依頼ホード、今年後の有効活用）」、「進予定」の共有、供職印の簡略化、「教材フォルダ」の積極的な活用、支援や指示内容の共有、学部業務マニュアルの作成

高等部

これまで培った力をもとに、学校・家庭・地域の中での活動を通して社会参加と自立に向けた実用的な力を伸ばす  
(1)自らの目標の実現に向けて、主体的に考え行動する意欲や態度を培う  
(2)社会の中で必要なルールやマナーの定着を図り、社会の一員としての態度を高める  
(3)一人一人の願いの実現を目指して、自己理解・自己選択・自己決定する力を育てる  
◆毎週金曜日！余暇ろう Day！  
◆余暇の充実を図るための定時運動  
◆定期整備！クリーン Day！  
◆毎週の清掃日と合わせて教材・教員、職員定資料の整理

支援部

○学校教育目標の実現に向けて、児童生徒の願いを実現するための校内支援を行う  
○地域における総合育成支援教育相談支援センターの核として、地域支援の充実を図る  
○相談支援機能の活性化を図る土台として、支援部教職員の専門性を高める  
○校内支援・地域支援への活用に向け、教材教員の整理・分類を行なう  
◆会議は30分以内で  
◆再支援センター業務マニュアルの作成

総務部

各部が円滑に連携して業務遂行できるよう、企画・運営面での調整を図る  
(1)児童生徒・教職員にとって安全で快適な学習環境・職場環境整備を推進する  
(2)教務一般の業務を迅速に行い、各部の業務が円滑に遂行されるよう努める  
(3)広報活動を通して、情報発信の活性化を図り、開かれた学校づくりを推進する  
(4)学校経営計画に基づいた予算の編成と効果的な執行を図る

つながる力・発信する力

6-1 実現度に関する分析結果 [保護者、教職員]

保護者（各部/全体）、教職員のアンケート結果より、肯定的な選択項目となる「よくできている」「大体よくできている」の回答を合わせた割合（％）を示す。

質問項目	上段が R7 前期/後期 下段が R6 前期/後期					※実現度（％）で示す
	保護者 （小）	保護者 （中）	保護者 （高）	保護者 （全）	教職員	
	1.学校は、子どもたちの思いや反応をていねいに受け止められている	98/94 98/98	91/93 97/98	98/95 95/94	97/94↓ 97/96	99/99 96/99
2.学校は、子どもたちがいろいろな人と関わって活動できるように取り組んでいる	98/91 92/96	94/98 100/97	97/99 97/98	96/96 96/97	95/97↑ 96/97	
3.学校は、子どもたちが「やってみよう」と思える学習に取り組んでいる	92/97 92/98	82/95 89/92	91/92 90/88	89/94↑ 90/93	95/93↓ 93/93	
4.学校は、子どもたちが自分なりの方法で思いや考えを伝えられるように取り組んでいる	98/96 92/100	91/95 92/92	94/97 96/92	95/96↑ 93/95	93/95↑ 98/96	
5.学校は、子どもたちの願いや目指す姿を本人や保護者と共有している	96/100 98/94	88/95 97/95	94/95 95/94	93/97↑ 97/94	90/93↑ 93/90	
6.学校は、子どもたちが役割を担い、やりがいを感じて活動できるように取り組んでいる	93/93 96/96	88/93 95/94	93/97 91/94	92/94↑ 94/95	96/96 96/98	
7.子どもたちは、自分なりの挨拶（発声、会釈、瞬き等の反応など）を実践できている	87/99 94/93	94/96 94/94	94/92 87/92	91/91 92/93	98/99↑ 97/97	
8.学校は、子どもたちがルールや約束を守ることの大切さを学べるように取り組んでいる	91/89 96/92	93/90 92/97	96/93 96/92	93/91↓ 95/93	96/94↓ 93/95	
9.学校は、お便りやホームページなどを通して日々の教育活動を発信できている	100/100 98/95	94/100 100/98	94/96 95/92	95/98↑ 98/94	90/92↑ 90/91	
10.学校は、外部関係機関や地域との連携を大切にしている	87/89 86/95	80/91 86/87	83/87 80/78	84/89↑ 84/88	91/90↓ 87/89	
11.学校は、子どもたちが安心・安全に学ぶ場となっている	98/98 98/100	93/97 97/98	98/97 97/92	96/98↑ 97/96	94/96↑ 95/96	

以下は、教職員のみ尋ねた回答結果を示す

12.生活を豊かにする手段として、情報端末機器を積極的に活用している					85/86↑ 85/87
13.子どもたちが何を学び、何ができるようになったのかを評価し、授業改善につなげている					92/86↓ 85/87
14.地域の学校園・施設、関係機関からの相談に丁寧に応えられている					78/74↓ 77/74
15.組織的・効率的な業務の見直しに向けて、意見交換し合える風通しのよい職場である					85/83↓ 81/81
16.ワーク・ライフバランスを意識できている					78/76↓ 73/66

## 保護者のアンケート結果より

令和7年度の保護者アンケート（全体）では、後期の平均満足度が94.4%となり、前期から+1.55ポイント上昇した。

改善が大きかった項目としては、

Q3「“やってみたい”と思える学習」+5ポイント（89→94）

Q10「外部との連携」+5ポイント（84→89）

Q5「願いや目指す姿の共有」+4ポイント（93→97）

いずれも、子どもたちの学習意欲や学校と地域・外部とのつながりの強化に関する項目であり、保護者から高く評価された点である。

これらについては、今年度より発足した「地域協働PJ」の取り組みも影響しているように考えられる。学校と地域や団体が連携した多様な活動が展開されており、子どもたちの「やってみたい」を引き出す教育活動や外部連携の充実に寄与している。具体的には、次のような取り組みが挙げられる。

- ・エプソンによる社会貢献事業「ゆめ水族園」
- ・外部講師による体験活動「シャボン玉ほいほい」「パフォーマンス・ラボ」等
- ・京都伏見ロータリークラブとの交流企画「みんな集まれ！くれたけ祭」
- ・地域資源を活用した学習活動「青少年科学センターの清掃」「近隣保育園との交流」等
- ・地域イベントへ参加「ぷらっとフェスティバル in 南区役所」「介護予防体操教室 in 福祉事業所」等
- ・地域協力型の取組「牛乳パックの回収（近隣スーパーや地域・保護者の協力による）」等

これらの活動は、子どもたちが新しい体験に挑戦したり触れられたりする機会を広げ、結果としてアンケートの改善項目に直結していると言えるのではないだろうか。

さらに、これらの取組については必ずホームページで公開しており、取り組みの“見える化”も進めている。1月からは、全市的にホームページがリニューアルされ、一度に添付できる写真枚数が増えたことで、活動の様子をより臨場感をもって伝えられるようになったと感じている。加えて、宿泊学習や修学旅行の様子については、これまで同様、該当学年の保護者に向けて「すぐー」で配信している。

今後も、日々の教育活動を保護者がより身近に感じられるよう情報発信を継続し、学校と家庭・地域がともに子どもたちの成長を支えていけるよう取り組んでいきたい。

一方で、後期にかけてわずかだが評価が下がった項目として、

Q1「思いや反応をていねいに受け止めている」-3ポイント（97→94）

Q8「ルールや約束の大切さを学べる取り組み」-2ポイント（93→91）

が挙げられる。いずれの項目も概ね90%以上と高い実現度を維持しているものの、学校づくりをさらによくしていくために改善の視点は持つておきたいと考える。

Q1のわずかな低下については、日常の関わりの様子が家庭からは見えにくいことが一因と考えられる。そのため、日々の連絡ノート、必要に応じた電話やすぐーでの丁寧な連絡を継続しながら、参観日などで子どもたちの“できる姿”を見てもらうことが改善につながると考える。

また、ルールや約束についても同様で、子どもたちが日常生活の中で学んでいる姿が、家庭からは見えにくい点が影響している可能性が考えられる。何かあった時には、保護者と（場合によっては関係者とも）方向性を共有しながら一緒に考えていく姿勢を大切に、子どもたちが身に付けてきた力や積み重ねてきた経験を、地域社会や卒業後の生活へつなげていく視点を忘れずに取り組んでいきたい。

## 教職員のアンケート結果より

保護者と同様の項目（Q1～Q11）について、教職員の回答は全体的に高い水準となっている。なかでも、子どもたちの思いや反応をていねいに受け止める姿勢や、自分なりの挨拶の実践については、前後期ともに98～99%と特に高く、日頃の関わり方そのものがしっかり定着していることが伺える。

また、Q2の「いろいろな人との関わり」についても97%と高く、地域や団体との連携を活かした活動が、学部を超えて実践できている点も評価に反映されていると感じる。校内での広がりも含め、子どもたちの交流や経験が着実に積みあがっている様子が伺える。

一方で、Q10「外部関係機関や地域との連携」は、高い水準を保ちながらも、他項目と比べると相対的にやや低めである。絶対的な課題というよりは、今後さらに伸ばしていける領域であり、呉竹ならではの、子どもたちの強みも生かした取組として継続し、積極的に実践・公開していくことで、保護者・教職員双方の評価がより高まっていくことが期待できると考える。

情報端末機器の活用については、比較的高い水準での横ばいとなっているが、これは昨年度同様、担当部署や分掌による使用頻度の差が影響していると考えられる。今後ICT活用はより専門的な広がりを見せていく分野であり、定期開催している専門主事によるICT学習会の継続的な実施は大きな役割を果たしている。また、今年度発足した「地域支援PJ」では、「教材ルールの開発」を掲げ、日々の実践を共有できるような発信にも支援部が中心となって取り組んでいる。これらの取組が進むことで、教職員自身が“個人の使用頻度”として捉えるのではなく、学校全体としてICTをどう活用しているか、という視点で回答する意識が自然と広がっていくと期待したい。

日々の授業改善や組織運営に関わるQ13～16について、全体として着実な前進が見て取れる。Q13「学習評価を授業改善につなげている」では、前期が92%と大きく伸び、後期は86%と前年水準へと落ち着いており、発展と定着が伺える。また、組織運営に関わる「風通しのよい職場」や「ワーク・ライフバランスの意識」も前年より大きく改善しており、教職員全体で自由な発想を大切にしながら、活発な意見交換を積み重ねてきた成果が表れているといえる。

このような流れは、「みんなで取り組んでいる」という学校全体の意識の変化そのものが影響してくる。働き方の見直しについては、まだまだ改善が求められる領域でもあるため、引き続き小さな改善を積み重ねていくことで、さらに安定した評価へとつなげていきたい。

## 6-2 実現度に関する分析結果 [児童生徒]

児童生徒の実態に応じて、本人による回答、担任による聞き取り等で回答を行っている。表では、児童生徒のアンケート結果より、小学部・中学部・高等部の「そう思う」の回答を合わせた割合（％）を示す。

質問項目	上段 R7 前期/後期
	下段 R6 前期/後期
1.自分の心や体を大切にしている	83/83 ----- 68/80
2.友達と仲良く過ごさせている	83/85↗
3.学校で「やってみたい」と思える活動がある	70/74↗ ----- 63/73
4.困った時など先生に相談している	81/74↘ ----- 70/81
5.こんな自分になりたいという願いや夢をもっている	63/73↗ ----- 66/69
6.学校で決まった役割がある	84/88↗ ----- 75/90
7.自分なりの方法であいさつができています	91/79↘ ----- 75/82
8.ルールや約束を守って行動できている	84/82↘ ----- 77/86
9.授業や活動の内容が理解できている	86/89↗ ----- 73/86

全項目平均より、R7 前期 80.6%、後期 80.8%とほぼ変動はなく、年間を通して安定した結果となった。前年度と比較をすると、R6 前期 72.9%、後期 82.1%であり、R6 から R7 にかけて前期の大幅な改善が顕著であった。これについては、年度当初の授業づくり・環境設定が、早期段階で子どもたちの安心感へとつながり、学習参加等への意欲にもつながっていったと考えられる。

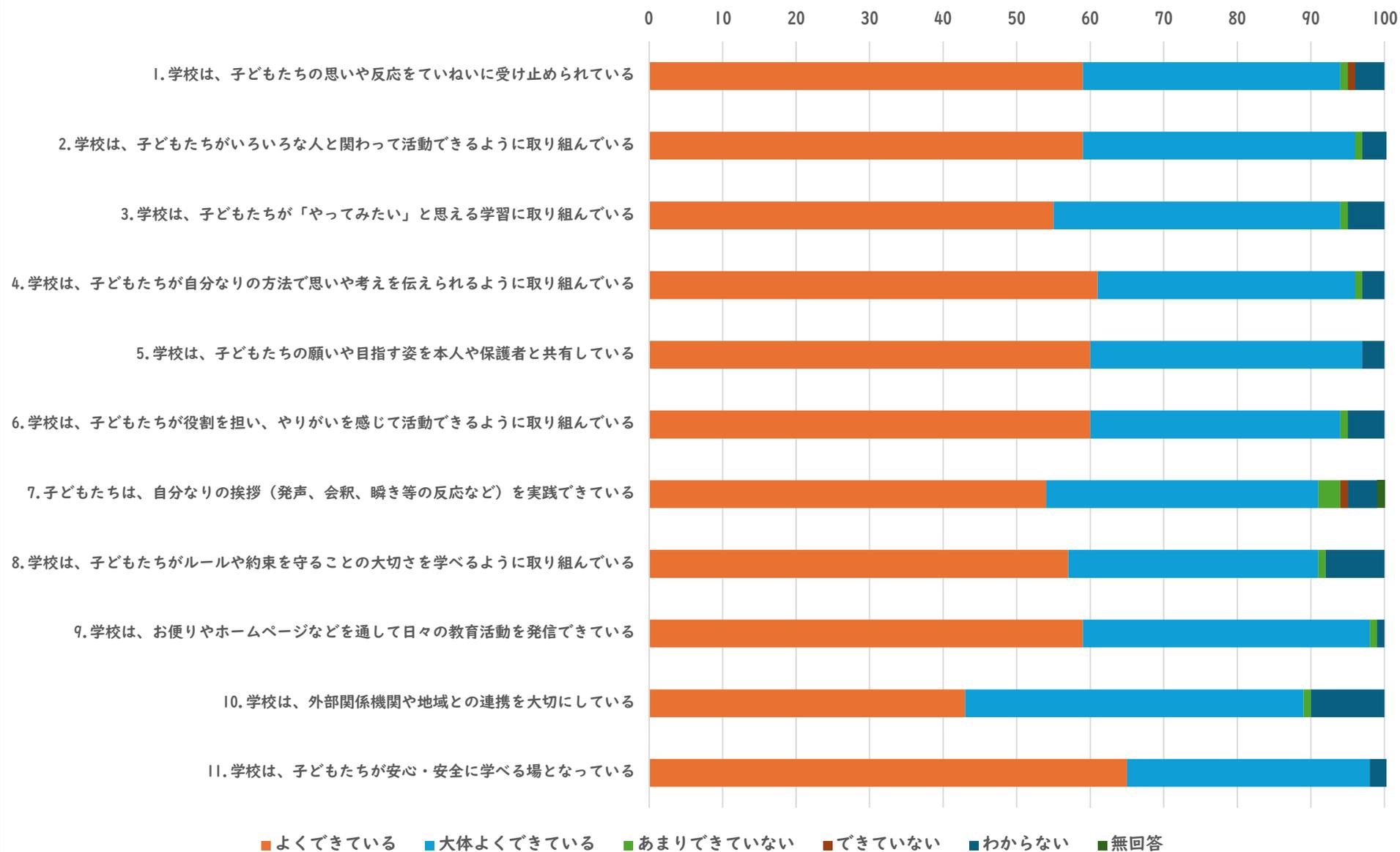
R7 後期を項目別に見ると、「授業・活動の理解 89%」「学校での役割 88%」が最も高く、学習内容の見通しや役割活動の充実が子どもたちの学びをしっかりと支えている様子が伺える。一方で、「願いや夢 73%」「やってみたい活動 74%」「困った時の相談 74%」は相対的に低い。「願いや夢」について、保護者・教職員は高い水準を維持しているため、対話を通して本人理解を深めていく必要性も感じられる。

また、Q7「あいさつ」については、前期から 12pt の低下が見られる。学校祭などの行事による生活リズムの変化に伴う心身の疲れに加え、後期は対人関係にも慣れが出始め、前期の緊張感や意識的な頑張りが自然と落ち着く時期でもある。さらに、後期は振り返る機会も多く、子どもたちがより厳しい自己評価を行う傾向も影響している可能性がある。

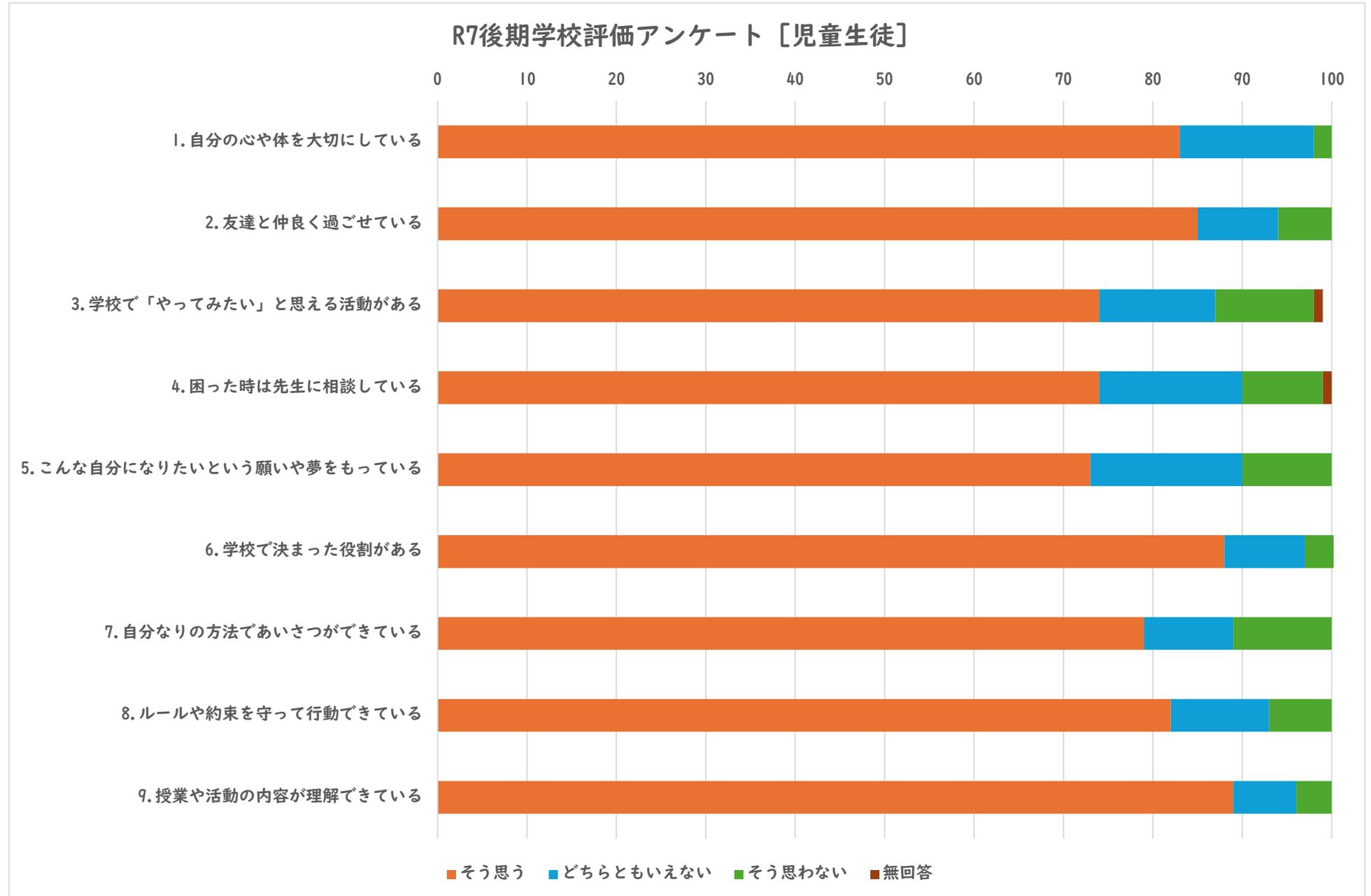
これらの結果を踏まえ、子どもたち自身が自分の「夢や願い」をデザインし、困った時に支えられる環境をさらに整えながら、グランドデザインに基づく“めざす児童生徒像”を進めていきたい。

7-1 実現度比較

R7後期学校評価アンケート [保護者]



7-1 実現度比較



7-1 実現度比較

R7後期学校評価アンケート [教職員]

